

解題

詩格集成 一卷

樗園長山貫著

此書は宋元明清の詩話及び諸家の隨筆雜著に就いて、詩の體格聲韻等に關する説を抄録したるものにて、時に又自説を録せり、絶えて新奇にして人を喜ばしむる所なきも、布帛菽粟、日用缺く可らざる説多し、原本は木雕活字本にして、世に流布するもの極めて稀れなり、序跋なし、故に著者の履歴及び刊行の年月を知るに由なきは、洵に遺憾なり、原本には、目次を掲げず、今新に之を作り、卷首に置き、以て査閲に便す。

詩格集成目次

詩之原始	九	口號	九	句中對	一六	四異格	二二
詩體	二	口占	九	蹉對	一六	應字格	二二
正格	二	詩八病	九	假對	一七	雙尾格	二二
平仄	三	句眼	一一	扇對	一七	損益字法	二二
押韻	三	調聲	一一	三言詩	一八	三韻律	二二
無韻詩	五	練字	一一	三截體	一八	五句格	二二
和韻	六	同韻病	一二	句作兩節	一八	五言三句格	二二
追和	七	八腰仄	一二	拆句格	一八	隔句韻	二二
詩題	八	蜂腰	一三	折腰句	一九	疊韻體	二三
無題	八	古詩	一三	倒句	一九	偏傍體	二三
樂府	九	聯句	一四	翻案句法	二〇	回文	二三
雜詩	九	律體	一五	疊字體	二〇	首尾吟	二四
		排律	一五	用子母字粧句	二〇	略字格	二四
		絕句	一六	法	二〇	益字格	二四

詩格集成目次

五七言格……………	二四	集句詩……………	二八	隱語……………	三五
六七言格……………	二五	拗句格……………	二八	倒字……………	三五
三七言格……………	二五	吳體……………	三一	詩癖……………	三六
轉句六字格……………	二五	虛接格……………	三三	詩地相肖……………	三六
三五七言格……………	二五	香奩體……………	三三	剽竊……………	三六
三韻分押……………	二五	竹枝詞……………	三三	拙句……………	三七
五平五仄體……………	二六	楊柳枝……………	三三	詩話……………	三七
偷春格……………	二六	白戰……………	三四	詩文集……………	三七
十字句法……………	二六	用助字格……………	三四	梵詩……………	三八
六言詩……………	二六	雙聲疊韻……………	三四	詩境……………	三八
互體……………	二七	襲用體……………	三四	餘論……………	三八
擲韻……………	二七	古人姓名藏句			
轆轤韻……………	二七	中格……………	三五		
別體……………	二八	藥名入句中格……………	三五		

詩格集成

東都 樗園 長山 貫著
尾陽 魁堂 鳴惟 新 技

詩之原始 詩之起也、其來尙矣、尙書舜典曰、詩言志、歌永言、事物紀原曰、樂章之謂詩、始於太昊之世、林少穎曰、舜與皋陶之廢歌、三百篇之權輿也、學詩者、當自此始。

天爵堂筆餘曰、三百篇詩之祖也。

周禮大師教六詩、曰風曰賦曰比曰興曰雅曰頌、以六德爲之本、中和祇庸孝友、以六律爲之音。

胡元瑞曰、三百篇、薦郊廟、被管絃、詩卽樂府、

詩の原始 詩の起るや、其の來る尙し、尙書舜典に曰、詩は志を言ひ、歌は言を永くす、事物紀原に曰、樂章を之れ詩と謂ふ、太昊の世に始ると、林少穎曰、舜と皋陶との廢歌は、三百篇の權輿なり、詩を學ぶ者當に此より始むべし。

天爵堂筆餘に曰、三百篇は詩の祖なり。

周禮に大師六詩を教ふ、曰風曰賦曰比曰興曰雅曰頌、六德を以て之れか本と爲す、中和祇庸孝友、六律を以て之れか音と爲す。

胡元瑞曰、三百篇は、郊廟に薦め、管絃に被らす、詩は卽ち

樂府卽詩也。至漢詩與樂府門類始分。

嚴滄浪曰風雅頌既亡一變而爲離騷再變而爲西漢五言三變而爲歌行雜體四變而爲沉宋之律體。

詩體 元稹集曰詩訖于周雜騷訖于楚是後詩人流爲二十四名賦頌銘贊文誄箴詩行詠吟題怨歎章篇操引謠謳歌曲詞調。

堯章曰守法度曰詩放情曰歌體如行書曰行兼之曰歌行序先後載始末曰引吁嗟慨悲如蚤蟻曰吟陰蓄諸音而通俚俗曰謠聲音高下委曲盡情曰曲操守有常雖窮阨猶不失其操曰操。

正格 沉存中筆談曰第二字側入謂之正格第二字平入謂之偏格唐名賢詩多正格

樂府樂府は、卽ち詩なり、漢に至て、詩と樂府と、門類始て分る。

嚴滄浪曰風雅頌既に亡び、一變して離騷となり、再變して西漢の五言と爲り、三變して歌行雜體と爲り、四變して沉宋の律體と爲る。

詩體 元稹集に曰詩は周に訖り、離騷は楚に訖る、是の後詩人の流二十四名となる、賦頌銘贊文誄箴詩行詠吟題怨歎章篇操引謠謳歌曲詞調。

堯章曰法度を守るを詩と曰ひ、情を放つを歌と曰ひ、行書の如きを行と曰ひ、之を兼ねるを歌行と曰ひ、先後を序で始末を載するを引と曰ひ、吁嗟慨悲蚤蟻の如きを吟と曰ひ、陰に蓄音を蓄へ而して俚俗に通するを謠と曰ひ、聲音高下、委曲情を盡すを曲と曰ひ、操守、常有り、窮阨すと雖も、猶其の操を失はざるを操と曰ふ。

正格 沉存中の筆談に曰第二字側入、之を正格と謂ひ、第二字平入、之を偏格と謂ふ、唐の名賢の詩、正格多し。

平仄 枕山樓詩話曰、學詩要先知平仄、此二字不辨、匪獨聲音不協、抑且規式有乖。

押韻 嚴滄浪曰、古詩有一韻兩用者、文選曹子建美女篇、有兩難字、古詩有一韻三者、文選任彥昇詩、三用情字、是也、有古詩三韻六七用者、古詩有重用二十許韻者、有古詩旁取六七韻者、韓退之此日足可惜篇、是也、凡雜用東冬江陽庚青六韻、貫按、如元和聖德詩、通用語、魔馬有架五韻、孟東野失子詩、通用先寒刪真文元六韻。

趙甌北曰、吳梅村詩、有通用真文元青庚蒸侵者、有通用支微齊魚者。

魏鶴山云、除科舉之外、閑賦之詩、不必一一以韻爲較、況今所較者、特禮部韻耳、楊誠

平仄 枕山樓詩話に曰、詩を學ふには、先づ平仄を知るを要す、此の二字辨せざれば、獨、聲音協はざるのみに匪ず、抑、且つ規式乖く有り。

押韻 嚴滄浪曰、古詩に一韻兩用の者有り、文選の曹子建か美女篇、兩の難の字有り、古詩に一韻三用の者有り、文選の任彥昇の詩に、三たひ情の字を用ふる是なり、古詩三韻六七用の者あり、古詩に二十許韻を重用する者あり、古詩に、六七韻を旁取する者あり、韓退之の此の日惜むべきに足る篇、是なり、凡そ東冬江陽庚青六韻を雜用す、貫按するに、元和聖德の詩の如きは、語聲馬有架の五韻を通用す、孟東野の失子詩、先寒刪真文元の六韻を通用す。

趙甌北曰、吳梅村の詩に、真文元青庚蒸侵を通用する者有り、支微齊魚を通用する者有り。

魏鶴山云、科舉を除くの外、閑賦の詩は、必しも一々韻を以て較するを爲さず、況や今較する所の者は、特に禮

齋云、今之禮部韻、乃是限制士子程文、不許出韻、因難以見其工耳、至於吟詠情性、當以國風離騷爲法、又奚禮部韻之拘哉、貫按、洪武正韻、有東無冬、有陽無江、是張潮所謂聲音之道、時代爲變遷者、可見。

野客叢書曰、古人不忘重韻、杜甫飲中八仙歌、用三前三船二眠二天、栢梁臺詩、用三之三治二哉二時二來二材。

貫按、三百篇無不轉韻者、古詩有隔一韻又用前韻者、元丹邱巫山屏風詩是也、李白江夏行、再用支韻、猛虎行、三用真韻、此類尙多、轉韻之例、依古人之詩、以可知。

滄浪曰、借韻、如押七支韻、可借八微或十二齊、一韻是也、案、通韻、卽東冬也、支卽齊也、魚

部韻のみ、楊誠齋云、今の禮部韻は、是れ士子の程文を限制し、出韻を許さず、難きに因つて、以て其工を見はすのみ、情性を吟詠するに、至ては、當に國風離騷を以て法と爲すべし、又奚を禮部韻に之れ拘せんやと、貫按するに、洪武正韻、東有て冬無く、陽有て江無し、是れ張潮の謂は所る聲音の道、時代に變遷を爲す者、見るべし。

野客叢書に曰、古人重韻を忌まず、杜甫の飲中八仙歌は、三つの前三つの船、二つの眠、二つの天を用ふ、栢梁臺の詩は三つの之三つの治、二つの哉、二つの時、二つの來、二つの材を用ふ。

貫按するに、三百篇韻を轉ぜざる者無し、古詩に一韻を隔て、又前韻を用ふる者有り、元丹邱の巫山屏風の詩は、是れなり、李白の江夏行は、再び支韻を用ひ、猛虎行は、三ひ真韻用ふ、此の類尙多し、轉韻の例、古人の詩に依て、以て知るへし。

滄浪曰、借韻は七支の韻を押するに、八微或は十二齊の一韻を借る可きが如きは、是れなり、案するに、通韻は、卽ち

虞也、佳灰也、眞文也、元寒刪先也、蕭肴豪也、歌麻也、庚青蒸也、覃鹽咸也、六朝之詩、多通押之、隨園詩話曰、看唐人律詩、通韻極多、

又曰、李義山、屬對最工、而押韻頗竟、如東冬蕭肴之類、律詩中、竟時通用、唐人不以嫌也、貫按、仄韻亦然、老杜悲陳陶七古、石壕吏五古、紙竄通用、白樂天琵琶行、語遇有御慶通用、東坡巫山詩、紙尾竄未通用。

無韻詩 古詩有全不押韻者、如采蓮曲是也、日知錄曰、詩以義爲主、音從之、必盡一韻無可用之字、然後旁通他韻、又不得於他韻、則寧無韻、苟其義之至當、而不可以他字易、則無韻不害、漢以來、往往有之、杜詩、暮投石壕村、有、更、夜、捉、人、兩韻也、至當不可易、下句

冬なり、支微東冬なり、支微齊なり、魚眞なり、佳灰なり、眞文なり、元寒刪先なり、蕭肴豪なり、歌麻なり、庚青蒸なり、覃鹽咸なり、六朝の詩、多く之れを通押す、隨園詩話に曰、唐人の律詩を看るに、通韻極めて多し。

又曰、李義山、屬對最も工み、而して押韻頗る竟はる、東冬蕭肴の類の如き、律詩中、竟時通用す、唐人以て嫌はざるなり、貫按するに、仄韻も亦然り、老杜の陳陶を悲む七古、石壕吏の五古、紙竄通用す、白樂天の琵琶行、語遇有御慶通用す、東坡の巫山の詩、紙尾竄未通用す。

無韻の詩 古詩に全く韻を押せざる者有り、采蓮曲の如きは是れなり、日知錄に曰、詩は義を以て主と爲し、音之れに従ふ、必一韻を盡して用ふべきの字なく、然後に他韻に旁通し、又他韻を得ざれば、則寧ろ無韻ならん、苟も其の義の至當にして他字を以て易ふべからざれば、則無韻も害せず、漢以來、往々これあり、杜詩に「暮に投す石壕村、更有り夜、人を捉ふ」兩韻なり、至當易ふべからず、

云、老翁踰垣走、老婦出門看、則無韻矣、李詩、天馬歌、白雲名青天、北陵遠崔嵬、二句、及野田黃雀行首二句亦無韻。

和韻 宋朝類苑曰、唱和聯句之起、其源遠矣、自舜作歌、皋陶屬言、庶載、趙翼曰、古來但有和詩、無和韻、唐人有和韻、尙無次韻、次韻實自白居易始、依次押韻、前後不差、此古未所有也、貫按、皇朝林學士、一人一首、大津首和藤原大政遊吉野川詩之韻、是實在元、白劉酬和之前、可謂奇矣、玉礪雜書曰、梁武同王筠、和太子懺悔詩、是唐以前所見、事物紀原曰、顏延年、元暉、作詩相唱和、皆不次韻、至唐元稹作春深二十首、白居易劉禹錫和之、亦用其韻、及令狐楚和詩、多次其韻、次韻始

句に云ふ、老翁垣を踰て走り、老婦門を出て看る、則無韻なり、李詩の天馬歌に、白雲、青天に在り、北陵遠くして崔嵬の二句、及び野田黃雀行の首二句亦無韻。

和韻 宋朝類苑に曰、唱和聯句の起る、其の源遠し、舜歌を作り、皋陶屬言、庶載せしよりす、趙翼曰、古來但有和詩ありて和韻なし、唐人和韻有るも、尙、次韻なし、次韻は實に白居易より始る、次に依て韻を押し、前後差へず、此れ古未た有る所にあらざるなり。

貫按するに、皇朝の林學士、一人一首、大津首に藤原大政の吉野川に遊ふ詩の韻に和す、是れ實に元白劉酬和の前に在り、奇と謂ふべし、玉礪雜書に曰、梁武の王筠が、太子懺悔の詩に和するに同すと、是れ唐以前の見る所、事物紀原に曰、顏延年、元暉、詩を作て相唱和す、皆次韻せず、唐の元稹春深二十首を作り、白居易劉禹錫之に和するに至り、亦其韻を用ふ、令狐楚の和詩に及んで、多く其韻

於此、詩體明辨曰、古人庶和答其來意而已、初不爲韻所縛、如杜邇早發湘潭、寄杜甫云、相憶無南鴈、何時有報章、甫和云、雖無南鴈、看取北來魚、只採其意見答、不聞和韻也。

滄浪詩話曰、和韻最害人詩、古人酬唱不次韻、此風始盛於元白皮陸、本朝諸賢乃以此而闕工、遂至往復有八九和者。

詩體明辨曰、和韻有三體、一曰依韻、謂同在一韻中、而不必用其字也、二曰次韻、謂和其原韻、而先後次第皆因之也、三曰用韻、謂用其韻、而先後不必次也、又有因韻而增爲之者。

追和 詩林廣記曰、東坡謂古之詩人、有擬

を次す、次韻此に始る、詩體明辨に曰、古人の庶和は其來意に答るのみ、初より韻に縛せられず、杜邇、早に湘潭を發し、杜甫に寄せて云ふ、相憶て南鴈無し、何の時か報章あらん、と甫和して云ふ、南過の鴈なしと雖も、看取す北來の魚の如き、只其意見を採て答ふ、和韻を聞かざる也。

滄浪詩話に曰、和韻は最、人の詩を害す、古人酬唱するに韻を次せず、此風始めて元白皮陸に盛なり、本朝の諸賢、乃此を以て工を闕し、遂に往復、八九和の者有るに至る、詩體明辨に曰、和韻に三體あり、一に曰、依韻、同く一韻中に在て而して、必しも其の字を用ひざるを謂ふなり、二に曰、次韻、其の原韻に和し、而して先後次第皆之に因るを謂ふなり、三に曰、用韻、其の韻を用ひて而して、先後必しも次せざるを謂ふなり、又韻に因て増して之を爲す者有り。

追和 詩林廣記に曰、東坡謂ふ古の詩人、擬古の作有り、

古之作矣、未有追和古人者也、追和古人之詩、則自東坡始矣、李白、潯陽紫極宮感秋詩、何處聞秋聲、憐々北窓竹、回薄萬古心、攬之不盈掬、坡追和云、寄臥虛寂堂、月明浸疎竹、冷然洗我心、欲飲不可掬。

詩題 詩三百篇、多用首句字名篇、如汎彼栢舟、以栢舟爲題、日知錄曰、杜甫詩、多取篇中字名之、如不見、李生久、則以不見名篇、近聞犬獸遠遁逃、以近聞名篇、皆取首二字爲題、全無意義、頗得古人之體。

無題 元詩體要曰、無題之詩起唐、李商隱多言閨情及宮事、故隱諱不名曰無題、其間用隱語也、春蠶到死絲方盡、蠟炬成灰淚始乾之類可見。

未だ古人に追和する者有らざるなり、古人の詩に追和するは、則東坡より始る、李白の潯陽紫極宮感秋の詩に、「何の處か秋聲を聞く、憐々北窓の竹、回薄萬古の心之を攬て掬に盈たす」と坡追和して云ふ、「寄臥す虛寂の堂、月明疎竹を浸す、冷然我が心を洗ふ、欲まん」と欲して掬す可からず。

詩題 詩三百篇、多く首句の字を用ひて篇に名く、汎たる彼の栢舟の如き、栢舟を以て題と爲す、日知錄に曰、杜甫の詩多く篇中の字を取て之に名く、「李生を見ざる」と久しの如き、則不見を以て篇に名く、「近ごろ聞く犬獸遠く遁逃す」と、近聞を以て篇に名く、皆首の二字を取て題と爲す、全く意義なし、頗る古人の體を得たり。

無題 元詩體要に曰、無題の詩は唐に起る、李商隱多く閨情及び宮事を言ふ、故に隱諱して名けずして無題と曰ふ、其の間に隱語を用ふるなり、春蠶死に到て絲方に盡き、蠟炬灰と成て涙始て乾くの類見る可し。

樂府 滄浪詩話に曰、樂府は漢の成帝郊祀を定め、樂府

樂府 滄浪詩話曰、樂府漢成帝定郊祀、立樂府、採齊楚趙魏之聲、以入樂府、以其音詞可被於絃歌也、詩叢曰、樂府自魏失傳、文人擬作、多與題左。

雜詩 李善曰、遇物卽言、不拘流例也。

口號 潛確類書曰、口號、或四句、或八句、草成而速就、達意宣情而已。

口占 漢書陳遵傳曰、憑几口占、書數百封、謂口誦、使旁人記也、杜詩注云、口占、率意作也。

詩八病 滄浪詩話曰、八病、謂平頭、上尾、蜂腰、鶴膝、大韻、小韻、正紐、旁紐、作詩者、正不必拘、此蔽法、不足據也、補閑集曰、八病、是好事者閑談、王敬美曰、八病、古今犯者不少、寧盡

を立て、齊楚趙魏の聲を採て以て樂府に入る、其の音詞絃歌に被らしむ可きを以てなり、詩叢に曰、樂府は魏より傳を失す、文人の擬作、多く題と左ふ。

雜詩 李善曰、物に遇ふて卽ち言ふ、流例に拘らざるなり。

口號 潛確類書に曰、口號、或は四句、或は八句、草成て速に就り、達意情を宣るのみ。

口占 漢書陳遵傳に曰、几に憑て口占し、數百封を書し、口誦と謂ふ、旁人に記せしむるなり、杜詩注に云ふ、口占は率意に作るなり。

詩八病 滄浪詩話に曰、八病は、平頭、上尾、蜂腰、鶴膝、大韻、小韻、正紐、旁紐を謂ふ、詩を作る者は、正に必しも拘らじ、此れ蔽法、據るに足らざるなり、補閑集に曰、八病は、是れ好事者の閑談、王敬美曰、八病は、古今犯者少からず

被汰乎、元兢曰、八病、近代咸不以爲累。

貫按、八病之目、沉約本傳無所見、但在南史陸厥傳、揚升菴之說頗詳、舉于左。

○平頭、謂第一字不得與第六字同平聲、律詩如風勁角力鳴、將軍獵渭城、風之與將、何損其美、○上尾、謂第五字不得與第十字同聲、如古詩西北有高樓、上與浮雲齊、雖隔韻何害、律固無是矣、使同韻如前詩鳴之與城、又何妨、○蜂腰、謂第二字第五字、同上去入韻、如老杜望盡似猶見、近體宜少避之、亦無妨、○鶴膝、謂第五字不得與第十五字同、如老杜水色含群動、朝光接大虛、年侵頻悵望之類、八句俱如是、則不宜一字犯、亦無妨、○大韻、謂重疊相犯、如胡姬年十五、春日獨當

春、蓋被汰せんや、元兢曰、八病は、近代咸以て累と爲さず、貫按するに、八病の目、沉約本傳に見る所無し、但南史陸厥傳に在り、揚升菴の説頗詳なり、左に舉ぐ。

○平頭は第一字、第六字と同く平聲なるを得ざるを謂ふ、律詩に「風勁して角力鳴る、將軍渭城に獵す」の如き、風と將と、何ぞ其の美を損せん、○上尾は、第五字、第十字と同聲なるを得ざるを謂ふ、古詩に「西北に高樓有り、上、浮雲と齊し」の如き、韻を隔つと雖も何ぞ害せん、律固よりはなし、同韻、前詩の鳴と城との如くならしむるも、又何ぞ妨けん、○蜂腰は、第二字第五字、上去入の韻を同うするを謂ふ、老杜の「望盡て猶は見るが如きに似たり」の如し、近體は宜しく少く之を避くべし、亦妨げなし、○鶴膝は第五字、第十五字と同きを得ざるを謂ふ、老杜の「水色群動を含み、朝光大虛に接す、年侵て頻に悵望す」の類の如き、八句俱に是の如なれば、則宜しく一字も犯すべからず、亦妨げ無し、○大韻は、重疊相犯すを謂ふ、胡姬年十

墟、又端坐苦愁思、攬衣起、西游胡、與墟愁、與游犯、○小韻十字中自有韻、如「遊帷鑑明月、清風吹我襟、明與清犯、○旁紐、十字中、已有田字、不得著寅延字、○正紐、一字中、已有壬字、不得著祗任字、後四病尤無謂、不足道也、」句眼 梁冰川曰、五言、以第三字爲眼、古人練字、只于句眼上練、詩眼用實字、方得句健、星河秋一鴈、砧杵夜千家、又、夜潮人到郭、春霧鳥啼山、七言、以第五字爲句眼、句眼字練、則句自精神、詩眼用實字、方句健、朝登劔閣雲隨馬、夜度巴江雨洗兵。

五、春日獨壇に當る、又「端坐苦に愁思す、衣を攬て起て西游す」の如き、胡と墟と、愁と游と犯す、○小韻は、十字の中、自ら韻有り、「遊帷明月鑑す、清風我が襟を吹く」の如き、明と清と犯す、○旁紐は、十字の中、已に田の字有らば、寅延の字を著くるを得ず、○正紐は十字の中、已に壬の字有らば、祗任の字を著くるを得ず、後の四病尤謂れ無し、道ふに足らざるなり。

調聲 空海文鏡祕府論曰、調聲之術有三、曰換頭、曰護腰、曰相承。

調聲 空海の文鏡祕府論に曰、調聲の術三有り、曰換頭、曰護腰、曰相承。

練字 容齋續筆曰、王荆公絕句云、京口瓜

練字 容齋續筆に曰、王荆公の絶句に云ふ、京口瓜洲一

洲一水閑、鍾山祗隔數重山、春風又綠江南岸、明月何時照我還、吳中士人家藏其草、初云、又到江南岸、圈去到字、改爲過、復圈去而改爲入、旋改爲滿、凡如是十許字、始定爲終、張文潛曰、世以白樂天詩爲得容易而成、嘗于洛中一士人家見白公詩草數紙、點竄塗抹、及其成篇、殆與初作不侔。

同韻病 戴叔倫、夜宿石頭驛詩、旅館誰相問、寒燈獨可親、一年將盡夜、萬里未歸人、寥落悲前事、支離笑此身、愁顏與衰鬢、明日又逢春、此詩、問夜事笑鬢五字皆去聲、故爲病。

八腰仄 陳子昂春夜別友人詩、銀燭吐青烟、金樽對綺筵、離堂思琴瑟、別路遶山川、明

水閑、鍾山祗隔數重山、春風又綠江南岸、明月何時照我還、吳中士人家、其の草を藏す、初めに云ふ、「又江南の岸に到る」と、到の字を圈去し、改めて過と爲し、復た圈去して改て入と爲し、旋あつて改て滿と爲す、凡そ是の如きこと十許にして、字始めて定めて綠と爲す、張文潛曰、世、白樂天の詩を以て容易にして成るを得ると爲す、嘗、洛中の一士人の家に于て、白公の詩草數紙を見る、點竄塗抹せり、其の篇を成すに及て、殆と初作と侔からず。

同韻病 戴叔倫の除夜、石頭驛に宿する詩に「旅館誰か相問はん、寒燈獨親む可し、一年將に盡きんとする夜、萬里未だ歸らざる人、寥落、前事を悲み、支離此の身を笑ふ、愁顔と衰鬢と、明日又春に逢ふ、此の詩、問夜事笑鬢の五字皆去聲、故に病と爲す。

八腰仄 陳子昂の春夜、友人に別る詩に、「銀燭青烟を吐き、金樽綺筵に對す、離堂琴瑟を思ひ、別路山川を遶る、明

月隱高樹、長河沒曉天、悠悠洛陽去、此會在何年、古唐詩合解曰、此詩、八腰皆仄聲、不覺其病、然亦當戒。

蜂腰 明辨曰、凡頷聯不對、卻以十字、敘一事、而意與首二句相貫、至頸聯方對者、謂蜂腰體、言已斷而復續也、如崔顥黃鶴樓、李白鸚鵡洲之類。

古詩 明辨曰、古詩尤長者、漢末建安時人為焦仲卿妻、作是古今第一首長詩。

潛確類書曰、四言詩起于漢楚王傳章孟。

海虞訥曰、七古起于漢栢梁臺體、武帝首句曰、日月星辰和四海、梁王襄繼之曰、騶駕駟馬從梁來、而下作者二十四人、至東方朔而止、每人一句、皆有韻貫按、栢梁臺詩、班史不

月、高樹に隠れ、長河、曉天に没す、悠悠、洛陽に去る、此の會何の年に在る、古唐詩合解に曰、此の詩、八腰皆仄聲、其の病を覺えず、然れども亦當に戒むべし。

蜂腰 明辨に曰、凡そ頷聯對せず、卻て十字を以て一事を敘し、而して意、首の二句と相貫き、頸聯に至て方に對する者を蜂腰體と謂ふ、言ふは已に斷えて復續ぐなり、崔顥の黃鶴樓、李白の鸚鵡洲の類の如し。

古詩 明辨に曰、古詩尤長者は漢末建安の時の人焦仲卿の妻の爲めに作る、是れ古今第一首の長詩。

潛確類書に曰、四言の詩は漢の楚王の傳章孟に起る、

海虞訥に曰、七古は漢の栢梁臺の體に起る、武帝の首句に曰、日月星辰四海を和く、梁王襄、之に繼で曰、騶駕駟馬從り來ると、而下作者二十四人、東方朔に至て止む、每人一句、皆韻あり、貫按するに、栢梁臺の詩、班史に載せ

戴、見、三秦記。

朱綠池曰、古詩韻法與賦同、賦逐段換韻、換韻處卽段落、段落必轉意、是其定法、古唐詩合解曰、古風中、凡轉韻處、意思必有轉換、文心雕龍曰、賈誼枚乘、四韻輒易、劉歆桓譚、百韻不遷、亦各從其志也。李于鱗曰、五言古詩起於李陵、按、野客叢書曰、余觀徐陵玉臺新詠、有枚乘雜詩九章、皆五言微章、此正明爲五言詩者、在李陵之前。

冰川詩式曰、學五言古詩者、須將古詩十九首熟讀玩味、方得旨趣。

聯句 沉括曰、聯句、虞廷賡歌、武帝栢梁、已肇其端矣、王伯大曰、古無此體、創自韓退之、按、六朝以前謂之連句、晉賈充與其妻連句、

す、三秦記に見ゆ。

朱綠池曰、古詩の韻法は賦と同じ、賦は段を逐ひ韻を換ふ韻を換ふる處は卽段落、段落は必意を轉ず、是れ其定法、古唐詩合解に曰、古風中、凡そ韻を轉ずる處、意思必轉換あり、文心雕龍に曰、賈誼、枚乘、四韻にして輒ち易ふ、劉歆、桓譚、百韻遷らず、亦各其志に従ふなり。李于鱗曰、五言古詩は李陵に起ると按するに、野客叢書に曰、余、徐陵の玉臺新詠を觀るに、枚乘の雜詩九章あり、皆五言微章、此れ正に明に五言の詩を爲る者は李陵の前に在り

冰川詩式に曰、五言古詩を學ぶ者は須らく古詩十九首を將て熟讀玩味すべし、方に旨趣を得ん。

聯句 沉括曰、聯句は虞廷の賡歌、武帝の栢梁、已に其の端を肇む。王伯大曰、古此の體なし、韓退之より創る、按するに、六朝以前之を連句と謂ふ、晉の賈充、其の妻と連

其後、陶謝諸人、亦偶爲之、又案、五言排律聯句、昉於白香山、謂之就對。

律體 詩法源流曰、五言七言八句、有對偶音律謂之律詩、明辨曰、白郎風、有觀閱既多、受侮不少之句、其對偶已工、石林詩話曰、魏晉之間、詩尙未知聲律對偶、陸雲相讖之辭、所謂日下荀鳴鶴、雲間陸士龍者、乃正爲的對、案、虞書、元首明、股肱良、堯典、聲依永、律和聲、亦的對、揚雄云、高饑顯、下祿隱、孔北海詩、坐上客常滿、樽中酒不空、亦同。

滄浪曰、有律詩至百五十韻、有律詩止三韻者、唐人有六句五言律。

排律 明辨曰、排律原於顏延之謝瞻諸人、陳梁以還、儷句尤切、唐興始專此體、而有排

句、其の後、陶謝諸人、亦偶之、爲之、又案、五言排律聯句、昉於白香山、謂之就對。

律體 詩法源流に曰、五言七言八句、對偶音律有り、之を律詩と謂ふ、明辨に曰、郎風より、閱に觀ふ既に多し、侮を受る少らずの句有り、其の對偶已に工、石林詩話に曰、魏晉の間、詩尙未だ聲律對偶を知らず、陸雲相讖の辭に謂はゆる、日下の荀鳴鶴、雲間の陸士龍といふ者、乃正に的對たり、案するに、虞書に、元首明なるかな、股肱良いかな、堯典に、聲は永に依り、律は聲を和す、亦的對なり、揚雄云ふ、高饑顯れ、下祿隱る、孔北海の詩に、坐上客常に滿ち、樽中酒空からず亦同し。

滄浪曰、律詩にして百五十韻に至る有り、律詩にして三韻に止る者あり、唐人に六句五言の律あり。

排律 明辨に曰、排律は顏延之謝瞻の諸人に原く、陳梁以還儷句尤切なり、唐興して始めて此の體を專にし、而し

律之名、楊升菴外集云七言排創於老杜、按楊說庸矣、六朝沉君收有桂檝汎中河詩、是乃七言排律。

絕句 明辨曰、絕句詩、原於樂府、下及六代、述作漸繁、唐初穩順聲勢定爲絕句、絕之爲言截也、卽律詩而截之也、又曰、唐人絕句、皆稱律詩、李漢編昌黎集、絕句皆入律詩、蓋可見矣。

句中對 元稹詩、四年三月半、新笋晚花時、司空曙詩、遠山芳草外、流水落花中、李嘉祐詩、孤雲獨鳥、川光暮、萬井千海、山氣深之類、容齋續筆曰、唐人或於一句中自成對偶、謂之當句對、蓋起於楚詞。

蹉對 王元之詩、春殘葉密花枝少、眠起茶

て排律の名あり、楊升菴外集に云ふ、七言排は老杜に創ると、按するに、楊說庸なり、六朝の沉君收、桂檝汎中河に汎ぶ詩有り、是れ乃七言排律。

絕句 明辨に曰、絕句の詩は、樂府に原く、下、六代に及て述作漸く繁し、唐初穩順聲勢定りて絕句と爲る、絕の言たる截なり、卽、律詩にして之れを截するなり、又曰、唐人の絕句、皆律詩と稱す、李漢の昌黎集を編するや、絕句は皆律詩に入る、蓋見るべし。

句中對 元稹の詩に、四年三月半、新笋晚花の時、司空曙の詩に、遠山芳草の外、流水落花の中、李嘉祐の詩に、孤雲獨鳥、川光暮れ、萬井千海、山氣深し」の類。

容齋續筆に曰、唐人或は一句中に於て自ら對偶を成す、之を當句對と謂ふ、蓋、楚詞に起る。

蹉對 王元之の詩に、春殘して葉密に花枝少し、眠起て

多酒盡疎、此一聯以密對疎、以多對少、正交股用之、故謂之交股對、唐李義山詩、裙拖六幅湘江水、髻挽巫山一段雲、亦同法。

假對 厨人具鷄黍、稚子摘楊梅、是楊羊同音、借對鷄也、捲簾黃葉落、開戶子規啼、是子紫同音、借對黃也、葉石林云、老杜對偶至嚴、而送楊某云、子雲清自守、今日起爲官、是爲假雲對日、兩句一意、乃詩家良法、陳后山詩、輟耕扶日月、起廢極吹嘘、是吹爲陰、嘘爲陽、與日月相對、貫按藏海詩話云、杜詩酒債尋常行處有、人生七十古來稀、尋常是數、所以對七十、又謂之借韻。

扇對 是以第一句對第三句、以第二句對第四句者、老杜七絕、昔時花下流連飲、暖日

茶多く酒盡疎なり、此の一聯、密を以て疎に對し、多を以て少に對し、正に交股これを用ふ、故に之を交股對と謂ふ、唐の李義山の詩に、「裙は拖く六幅湘江の水、髻は挽く巫山一段の雲、亦同法。

假對 「厨人鷄黍を具へ、稚子楊梅を摘す、是れ楊羊同音、借りて鷄に對す、」簾を捲けば黃葉落ち、戸を開けば子規啼く、是れ子紫同音、借りて黃に對す、葉石林云ふ、老杜對偶至嚴、而して楊某を送るに云ふ、「子雲清自ら守る、今日起て官と爲る、是れ雲を假りて日に對すと爲す、兩句一意、乃詩家の良法、陳后山の詩に、「耕を輟めて日月を扶け、廢を起して吹嘘を極む」是れ吹を陰と爲し、嘘を陽と爲し、日月と相對す、貫按するに、藏海詩話に云ふ、杜詩に「酒債尋常行く處に有、人生七十古來稀なり、尋常は是れ數、七十に對する所以なりと、又これを借韻と謂ふ。

扇對 是れ第一句を以て第三句に對し、第二句を以て第四句に對する者、老杜の七絶に、「昔時花下に流連して飲

天桃爲亂飛、今日江邊容易別、淡煙荒草馬
頻嘶、李白長干行、五日南風興、思君下巴陵、
八月西風起、想君發揚子之類。

三言詩 明辨曰、三言詩自漢始、冰川詩式、
載明蘇祐三言詩、將進酒、樂間陳錯華燈、雙
錦茵、觀良時、擁光塵、獻萬年、酬千金、嗟何辭、
不常醺、流水逝、曜靈沉。

三截體 李白詩、日落沙明天倒閉、波搖石
動水縈廻之類。

句作兩節 杜詩、不知西閣意、肯別定留人、
是肯別耶、留人耶也。

拆句格 玉屑曰、永叔詩、靜愛竹時來、野寺
獨尋春、偶過溪橋、盧贊元雪詩、想行客過
梅橋滑、免老農憂麥隴乾之類。

む、暖日天桃爲亂飛、今日江邊容易に別る、淡煙荒草
馬頻に嘶く、李白の長干行に、五日南風興る、君を思て巴
陵に下る、八月西風起る、君を想て揚子を發すの類。

三言詩 明辨に曰、三言の詩は漢より始る、冰川詩式に
明の蘇祐の三言の詩を載す、將さに酒を進んとす、樂間
陳す、華燈を錯ふ、錦茵を廻ぬ、良時に觀ふ、光塵を擁す、
萬年を獻す、千金を酬ゆの辭ぞ、常に酬せざらん、流
水逝く、曜靈沉む。

三截體 李白の詩に、日落ち沙明に天倒に閉く、波搖き
石動て水縈廻すの類。

句、兩節を作す 杜詩に、知らず西閣の意、肯て別るゝか
定めて人を留むるか、是れ肯て別るゝか人を留むるか
なり。

拆句格 玉屑に曰、永叔の詩に、靜に竹を愛して時に野
寺に來り、獨、春を尋て偶、溪橋を過ぐ、盧贊元の雪の詩
に、一行客、梅橋の滑を過るを想ひ、老農、麥隴の乾くを憂
るを免るの類。

折腰句 七言、上三字下四字、鳳皇樂奏鈞
天曲、烏鵲橋過織女河、或上五字下二字、杖
藜嘆世者誰子、中天月色好誰看、或上二下
五、不貪夜識金銀氣、遠害朝看鹿麋遊、之類
也

倒句 一名錯綜句、又名反句、杜詩、野禽啼
杜宇、山蝶夢莊子、香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲
老鳳皇枝、又、久拚野鶴如雙鬢、是謂雙鬢如
野鶴也、誠齋詩話曰、坡詩、雪乳已翻煎處
脚、松風仍作瀉時聲、此倒語也、尤詩家良法、
案、杜詩倒句極多、如縱酒欲謀良夜醉、還
家初散紫宸朝、是謀良夜醉、欲縱酒散紫宸
朝、初還家也、江閣邀賢許馬迎、午時起坐自
天明、是自天明起坐到午時也、丹鉛總錄

折腰句 七言、上三字下四字、鳳皇樂奏鈞天曲、烏鵲
橋過織女の河、或上五字下二字、杖藜世を嘆する者
は誰が子ぞ、中天月色の好き誰か看る、或は上二下五、貪
らずして夜、金銀の氣を識り、害に遠かりて朝に鹿麋の
遊ぶを看るの類なり。

倒句 一に錯綜句と名く、又反句と名く、杜詩に「野禽杜
宇啼き、山蝶莊子を夢む」「香稻啄み餘す鸚鵡粒、碧梧棲み
老ふ鳳皇枝」「又、久く野鶴雙鬢の如くなるを拚ふ」「是れ雙
鬢野鶴の如きを謂ふなり、誠齋詩話に「坡詩に「雪乳已
に翻る煎處の脚、松風仍ほ作す瀉時の聲、此れ倒語なり、
尤詩家の良法と案するに、杜詩に倒句極めて多し、酒を
縱にして謀らんと欲す良夜の醉、家に還て初て散す紫
宸の朝」の如き、是れ良夜の醉を謀りて酒を縱まにせん
と欲し、紫宸朝の朝を散じて初て家に還るなり、「江閣賢
を邀へて許馬迎ふ、午時起坐して天明よりす」是れ天明
より起坐して午時に到るなり、丹鉛總錄に曰、古人の語、

曰、古人語多倒、漢書中行説曰、必我也、爲漢
 惠者、若今人則云爲漢惠者、必我也、賈曰、有
 句倒而語奇者、家語、歌子和汝、禮記誰歎哭者、

翻案句法 此取古人句翻案之也、少陵、明
 年此會知誰健、醉把茱萸子細看之句、劉浚
 翻案云、不用茱萸子細看、管取明年各強健、
 杜牧詩、公道世間惟白髮、羅鄴詩、惟有春風
 不世情、丘瓊山翻案二句、白髮年來也不公、
 春風亦與世情同。

步

疊字體 吳融詩、一聲南鴈已先紅、撼々凄
 凄葉葉同、一句連三字者、劉駕詩、樹樹樹梢
 鶯啼曉、夜夜夜深聞子規、又爲對者、山谷雪
 詩、夜聽疎疎透密密、曉看整整復斜斜。

用子母字粧句法 竹疎烟補密、梅瘦雪添

倒多し、漢書、中行説曰、必ず我ならん、漢の患を爲す者
 と、今人の若きは則云ん、漢の患を爲す者は必我ならん
 と、賈曰、句倒して語奇なる者有り、家語に歎ふは予和す
 るは汝、禮記に誰ぞ哭する者は、

翻案の句法 此れ古人の句を取て之を翻案するなり、少
 陵、明年此の會知る誰か健なる、醉て茱萸を把て子細に
 看るの句、劉浚翻案して云ふ、用ひず茱萸子細に看る
 を、管取す明年各強健、杜牧の詩に、世間に公道たるは
 惟、白髮、羅鄴の詩に、惟春風の世情ならざる有り、丘瓊
 山二句に翻案す、白髮年來也た公ならず、春風亦世情と
 同じ。

疊字體 吳融の詩に、一聲南鴈已に紅に先ち、撼々凄々
 葉々同じ、一句三字を連る者には、劉駕の詩に、樹々々梢
 に鶯曉に啼き、夜々々深に子規を聞く、又、對を爲す者に
 は、山谷の雪の詩に、夜聽く疎々透密密、曉に看る整整
 復斜々。

子母字を用ひて粧ふ句法 竹は疎にして烟補ふて密、梅

肥。

四異格 是四句四意、卽少陵漫與詩是也、

應字格 首聯立二字、領聯應之、此格昉於

老杜、白居易詩、臥枕一卷書、起嘗一杯酒、書將引昏睡、酒用扶衰朽、此以酒書二字、應之也。

雙尾格 王維詩、依違動車馬、惆悵出松蘿、

忍別青山去、其如綠水何之類。

損益字法 詩眼曰、沉佺期詩、人如天上坐、

魚似鏡中懸、杜詩、春水船如天上坐、老年花

似霧中看、是也、杜詩、夜足沾沙雨、春多逆水

風、樂天詩、巫山夜足沾沙雨、隴水春多逆水

風、亦同。

三韻律 太白送內尋廬山女道士李騰空

は瘦せて雪添へて肥ゆ。

四異格 是れ四句四意、卽ち少陵漫與の詩是れなり。

應字格 首聯に二字を立て、領聯之に應ず、此の格、老杜

に昉る、白居易の詩に「枕に臥す一卷の書、起て嘗む一杯の酒、書は將に昏睡を引かんとす、酒は用ひて衰朽を扶く」此れ酒書の二字を以て之に應ずるなり。

雙尾格 王維の詩に「依違、車馬を動かし、惆悵、松蘿を出づ、青山に別れ去るに忍びんや、其れ綠水を如何せん」の類。

損益字法 詩眼に曰、沉佺期の詩に「人は天上に坐するが如く、魚は鏡中に懸るに似たり」杜詩に「春水の船は天上に坐するが如く、老年の花は霧中の看に似たり」是れなり、杜詩に「夜は足る沙を沾す雨、春は多し水に逆ふ風」樂天の詩に「巫山夜足る沙を沾す雨、隴水春は多し水に逆ふ風」亦同じ。

三韻律 太白の内の廬山の女道士李騰空を尋ぬるを送

詩、君尋騰空子、應到碧山家、水春雲母碓、風掃石榴花、若戀幽居好、相邀弄紫霞、是也、又謂之六句格。

五句格 第四句不入韻、以五句協韻、杜詩、曲江蕭蕭秋氣高、菱荷枯折隨風濤、遊子空嗟垂二毛、白日素沙亦相瀉、哀鴻獨叫求其曹之類。

五言三句格 王無功詩、問春桂、桃李正芳華、年光隨處滿、何事獨無花、春桂答、春花詎能久、風霜搖落時、獨秀君知否之類。

隔句韻 一名退進韻、李建勳詩、不喜長亭柳、枝枝擬送君、誰憐北窓下、樹樹欲留人、圓坐都如月、東西只似雲、愁看離席散、歸蓋動行塵、是真文二韻、隔句押者、又先翰二韻互

る詩に「君は尋ぬ騰空子、應に到るべし碧山の家、水は春く雲母碓、風は掃ふ石榴花、若し幽居の好きを戀は、相邀へて紫霞を弄せよ是れなり又之を六句格と謂ふ。

五句格 第四句韻に入らず、五句を以て韻に協ふ、杜詩に「曲江蕭々として秋氣高し、菱荷枯折して風濤に隨ふ、遊子空く嗟く二毛を垂るを、白日素沙亦相瀉す、哀鴻獨叫んで其の曹を求むの類。

五言三句格 王無功の詩に「春桂に問ふ、桃李正に芳華、年光隨處に滿つ、何事ぞ獨り花無き、春桂答ふ、春花詎ぞ能く久しからん、風霜搖落の時、獨秀、君知るや否や」の類、隔句韻 一に退進韻と名く、李建勳の詩に「喜はず長亭の柳、枝々君を送らんと擬す、誰か憐む北窓の下、樹々人を留めんと欲す、圓坐都て月の如し、東西只雲に似たり、愁ひ看る離席の散するを、歸蓋行塵を動かす、是れ真文二韻、句を隔て、押す者、又先翰二韻互に押す者、唐の章

押者、唐章碣詩、東南路盡吳江畔、正是窮愁
暮雨天、鷗鷺不嫌斜雪岸、波濤欺得送風船、
偶逢島寺停帆看、深羨漁翁下釣眠、今古著
論英達算、鷓夷高興固無邊。

疊韻體 皮日休詩、穿烟泉潺湲、觸竹攢叢
棘、荒篁香腦匡、熱鹿伏屋曲。

偏傍體 山谷詩、逍遙近道邊、憩息憇德瀆、
晴暉時晦明、誠語諧謙論、草萊荒蒙籠、室屋
壅塵盆、僕僮侍偏側、淫渭清濁渾。

回文 昉自晉溫嶠、東坡金山寺詩。

潮隨暗浪雪山傾、遠浦漁舟釣月明、
橋對寺門松逕小、巷當泉峴石波清、
迢迢遠樹江天曉、靄靄紅霞晚日晴、
遙望四山雲接水、碧峯千點數鷗輕。

碣の詩に、「東南路盡く吳江の畔、正に是れ窮愁暮雨の天、
鷗鷺嫌はず斜雪の岸、波濤欺き得たり風に送らるる船、
偶々島寺に逢て帆を停て看る、深く羨む、漁翁の釣を下
して眠るを、今古著論英達の算、鷓夷高興固より無邊」

疊韻體 皮日休の詩に、「烟を穿ちて泉潺湲、竹に觸れて
棘叢棘、荒篁香腦匡、熱鹿屋曲に伏す」。

偏傍體 山谷の詩に、「逍遙道邊に近き、憩息憇瀆を愬す、
晴暉時に晦明、誠語謙論に諧す、草萊荒れて蒙籠、室屋壅
りて塵盆、僕僮偏側に侍し、淫渭清濁渾す」。

回文 晉の溫嶠より昉（はな）、東坡金山寺の詩。

「潮は暗浪に隨て雪山傾き、遠浦の漁舟月明に釣る、
橋は寺門に對して松逕小、巷は泉峴に當て石波清し
迢々たる遠樹江天の曉、靄々たる紅霞晚日晴る、
遙に望む四山雲水に接す、碧峯千點數鷗輕し。」

首尾吟 此體創自邵康節其詩云廬山烟
雨浙江潮未到千般恨未消到得歸來無別
事廬山烟雨浙江潮。

略字格 樂天浪淘沙一泊沙來一泊去一
重浪減一重生此下句略上浪沙二字也賈
曰是卽照略照上略下者古人文章此例甚
多。

益字格 太白夢遊天姥吟留別詩雲之君
兮紛紛而來下虎鼓瑟兮鸞回車仙之人兮
如麻是益二之字整句案呂氏春秋直諫篇
得丹之姬淫期年不聽朝此益一之字卽同
法。

五七言格 李白詩銀鞍白鼻驕綠池潭泥
錦細雨春風花落時揮鞭直就胡姬飲。

首尾吟 此の體邵康節より創る其の詩に云ふ
「廬山の烟雨浙江の潮未到から千般恨未だ消せず
到り得て歸來別事無し廬山の烟雨浙江の潮」

略字格 樂天の浪淘沙に「一泊沙來て一泊去る一重浪
減じて一重生す」此れ下句に上の浪沙の二字を略する
なり賈曰是れ卽照略上に照し下を略する者古人の文
章此の例甚多し。

益字格 太白夢に天姥に遊び吟じて留別する詩に「雲
の君紛々として來り下る虎鼓瑟を鼓し鸞車を回らす仙
人は麻の如し是れ二の之の字を益して句を整ふ案す
るに呂氏春秋の直諫篇に丹之姬を得て淫し期年まで
朝を聽かずと此れ一の之の字を益す卽ち同法。

五七言格 李白の詩に「銀鞍白鼻驕綠池潭泥錦細雨春
風花落つる時鞭を揮ふて直に胡姬に就いて飲す」

六七言格 樂天花非花詩、花非花霧非霧、夜半來天明去、來時春霧幾多時、去似朝雲無覓處、此詩長慶集入古體。

三七言格 李詩、五花馬、千金裘、呼兒將出、換美酒、與爾同銷萬古愁、又有三言置末句者、我向淮南舉桂枝、君留洛北愁、夢思、不忍別、還相隨。

轉句六字格 張志和漁歌、西塞山前白鷺飛、桃花流水鱖魚肥、青篛笠綠蓑衣、斜風細雨不須歸。

三五七言格 李詩、秋風清、秋月明、落葉聚還散、寒鴉棲復驚、相思相見知何日、此時此夜難爲情。

三韻分押 楊誠齋詩、曉寒願影惜金衣、著

六七言格 樂天の花に非る詩、花に非ず霧に非ず、夜半に來り天明に去る、來る時春霧幾多の時去は朝雲に似て覓むる處無し、此の詩長慶集に古體に入る。

三七言格 李詩に「五花馬、千金裘、兒を呼び將ち出だし美酒に換へ、爾と同く銷せん萬古の愁、又、三言を末句に置く者有り、我は淮南に向つて桂枝を攀づ、君は洛北に留りて夢思を愁ふ、別るゝに忍ひず、還て相隨ふ。

轉句六字格 張志和の漁歌、西塞山前白鷺飛、桃花流水鱖魚肥、青篛笠、綠蓑衣、斜風細雨歸るを須ひず。

三五七言格 李詩に、「秋風清し、秋月明か、落葉聚りて還た散ず、寒鴉棲んで復た驚く、相思ひ相見る知んぬ何の日ぞ、此の時此の夜情を爲し難し」。

三韻分押 楊誠齋の詩に、「曉寒影を願みて金衣を惜む、

意聽時不肯啼飛入柳陰多處去、數聲只許落花知、此支微齊三韻分押、蓋通韻無害。

五平五仄體 秋原何蕭蕭、耳目去雜茸之類、七平七仄亦同、蓋句勢得健、挺然最妙。

儉春格 明辨曰、起聯相對、而次聯不對者、謂之儉春體、如言梅花儉春色、而先發也、杜甫寒食對月詩、無家對寒食、有淚如金波、斫卻月中桂、清光應更多、此離放紅糞、相像嘸青娥、牛女侵愁思、秋期猶渡河、又頸聯不對者、謂之儉春反格。

十字句法 曾茶山詩、又從江北路、重到竹西亭、若無三日雨、那得一年秋之類。

六言詩 茶氏集抄云、大抵雜體失粘不妨、止要理透、王維詩、桃紅復含宿雨、柳綠更帶

意を著て聽く時肯て啼かず、飛んで柳陰多き處に入り去る、數聲只許す落花の知るを、此れ支微齊の三韻分押す、蓋通韻害無し。

五平五仄體 「秋原何ぞ蕭々、耳目雜茸を去る」の類、七平七仄も亦同じ、蓋、句勢健なるを得、挺然最妙なり。

儉春格 明辨に曰、起聯相對し、而して次聯對せざる者、之を儉春體と謂ふ、梅花春色を儉みて先づ發すと言ふが如し、杜甫の寒食、月に對する詩に「家無く寒食に對す、淚有り金波の如し、月中の桂を斫卻して、清光應に更に多かるべし、此離、紅葉を放つ相像青娥を嘸す、牛女愁思を侵し、秋期猶河を渡る」、又頸聯對せざる者、之を儉春反格と謂ふ。

十字句法 曾茶山の詩に「又、江北の路に従ひ、重て到る竹西亭、若し三日の雨無れば、那ぞ一年の秋を得ん」の類。

六言詩 茶氏集抄に云ふ、大抵雜體は失粘するも妨けず、止、理の透るを要す、王維の詩に「桃紅復た宿雨を含む柳、綠更に朝烟を帯ぶ、花落ちて家、未だ掃はず、鳥啼いて

朝烟、花落家童未掃、鳥啼山客猶眠。

互體 鶴林玉露曰、杜詩風含翠篠娟娟淨、雨裏紅蕖冉冉香、上句風中有雨、下句雨中有風、楊誠齋詩、綠光風過麥、白碎日翻池、亦然、上句風中有日、下句日中有風。

擲韻 漢書胡廣傳、萬事不理、問伯始、天下中庸、有胡公、晉書王坦之傳、盛德絕倫、鄒嘉賓、江東獨步、王文度之類、賈曰、古人句中、押韻者、老子、知足不辱、知止不殆、韓非子、名正物定、名倚物徙之類、其他孟荀莊管、及淮南子等之書、押韻者、不勝枚舉也、古人所引、里諺、俚語、野語之類、無不押韻、有周人、名子以韻。

輓轅韻 朱綠池曰、古詩前後用同韻者、謂

山客猶眠。」

互體 鶴林玉露に曰、杜詩に「風含みて翠篠娟々淨く、雨裏ふて紅蕖冉冉香し」上句は風中に雨有り、下句は雨中に風あり、楊誠齋の詩に「綠光りて風、麥を過ぎ、白碎けて日、池に翻へる」亦然り、上句、風中に日有り、下句、日中に風有り。

擲韻 漢書胡廣傳に「萬事理せざれば伯始に問へ、天下の中庸は胡公有り」晉書王坦之傳に「盛德絶倫鄒嘉賓、江東獨歩王文度の類、賈曰、古人、句中に、押韻するもの老子に、足るを知れば辱られず、止るを知れば殆からず、韓非子に、名正しくて物走り、名倚て物徙るの類、其他孟荀莊管、及び淮南子等の書に、韻を押す者、枚舉に勝へざるなり、古人の引く所、里諺、俚語、野語の類、韻を押させざるは無し、有周の人は、子に名くるに韻を以てす。

輓轅韻 朱綠池曰、古詩前後同韻を用ふる者、之を輓轅

之轅轅韻。

別體 南濠詩話曰、袁景文初貧甚、嘗館授一富家、景文性疎豪、師道頗不立、其家別延陳文東、文東甚嚴、又善書、一日景文來訪、文東適出、因大書其案云、去年先生靡特已、今年先生罔談彼、若無幾箇始制文、如何教得猶子比、是拈出千字文中靡特已長、罔談彼短、始制文字、猶子比兒等句、戲之耳。

集句詩 明辨曰、雜集古句以成詩也、自晉以來有之、至王安石尤長于此、楊升菴曰、晉傅咸作七經詩、此乃集句之始、案、又有集字之詩帖、出千字文蘭亭帖等字作之。

拗句格 海藏詩話曰、唐常建詩、一徑遇幽處、蓋唐人作拗句、上句既拗、下句亦拗、所以

韻と謂ふ。

別體 南濠詩話に曰、袁景文、初め貧甚し、嘗て一富家に館授す、景文性疎豪、師道頗る立たず、其の家別に陳文東を延く、文東甚嚴なり、書を善す、一日景文來り訪ふ、文東適出づ、因て其の案に大書して云ふ、去年の先生已を恃む靡し、今年の先生彼を談する罔し、若し幾箇始制の文無ければ、如何ぞ教へ得ん、猶子の比、是れ千字文中の靡特已長、罔談彼短、始制文字、猶子比兒等の句を拈出し之に戲るのみ。

集句の詩 明辨に曰、古句を雜集し以て詩を成すなり、晉より以來、之れ有り、王安石に至て、尤此に長す、楊升菴曰、晉の傅咸、七經詩を作る、此れ乃集句の始と案するに、又集字の詩帖有り、千字文、蘭亭帖等の字を出して之を作る。

拗句格 藏海詩話に曰、唐の常建の詩に、一徑幽處に遇ふ、蓋唐人拗句を作る、上句既に拗すれば、下句も亦拗

對禪房花木深、遇與花皆拗故也、聲調譜拾遺曰、凡律詩上句拗、則下句猶可參用律調、下句拗、則上句必拗調協之、此不易之法、又曰、唐人五七言近體、起調多作拗體、可知律詩於起聯較寬也。

梁冰川曰、拗字換字法、或二四皆平或仄、或六四皆平或仄、或三字一連皆平或仄、或當平處以仄聲易之、又曰、拗句格、其法以當下平字處、以仄字易之、則有氣挺然不群、此體始於老杜。

漁隱叢話曰、律詩之作、用平仄、世固有定體、衆共守之、然不若時用變體、如兵之出奇、無窮。

袁石公曰、五言絕句、貴拗體、七言絕句、貴諧

す、禪房花木深しに對する所以なり、遇と花と皆拗する故なり、聲調譜拾遺に曰、凡律詩上句拗すれば、則下句猶ほ律調を參用す可し、下句拗すれば、則上句必拗調もて之に協ふ、此れ不易の法なり、又曰、唐人五七言近體、起調多、拗體を作す、律詩は、起聯に於て較、寬なるを知ら可し。

梁冰川曰、拗字換字法、或は二四皆平或仄、或は六四皆平或は仄、或は三字一連皆平或は仄、或は當に平なるべき處に仄聲を以て之に易ふ、又曰、拗字格、其の法、當に平字を下すべき處を以て、仄字を以て之に易へば、則氣挺然不群なる有り、此の體、老杜に始る。

漁隱叢話に曰、律詩の作、平仄を用ふ、世固より定體あり、衆共に之を守る、然れども時に變體を用ふる、こと、兵の奇を出だして、窮り无きが如くするに若かず。

袁石公曰、五言絶句は、拗體を貴ぶ、七言絶句は、諧和を貴

和。

日本詩話叢書

貫曰、五言、老杜、「一徑野花落、孤村春水生、岑
 參洗藥朝與暮、釣魚春復秋、七言、江天漠漠
 鳥雙去、風雨時時龍一吟之類、蓋拗之通格、
 又第三字有、挾仄或平者、如王維、流水如有
 意、暮禽相與還、其他不一定者、拗二聯三聯、
 及全首者、極多、泛取法唐人可也、蔡繼曰、魯
 直換字對句法、如曰、只今滿坐且酒尊、後夜
 此堂空月明、又曰、田中誰問不納履、坐上適
 來何處蠅、其法於當下平字處、以仄字易之、
 欲其氣挺然不群、貫曰、長孫佐輔詩、獨訪山
 家歇還涉、茅屋斜連隔松葉、主人聞語未開
 門、繞籬野菜飛黃蝶、此詩仄韻、而起承第二
 六字皆不粘、又、柳宗元詩、官情羈志共淒淒、

ふ。

三〇

貫曰、五言、老杜の「一徑野花落、孤村春水生、岑參の
 洗藥朝と暮と、釣魚春復た秋、七言、江天漠々鳥雙去、風
 雨時々龍一吟」の類、蓋拗の通格、又第三字、仄或は平を挾
 む者有り、王維の「流水意有るが如し、暮禽相與に還る」の
 如し、其他一定せざる者は、二聯三聯及び全首を拗する
 者、極めて多し、泛く法を唐人に取て可なり、蔡繼に曰、魯
 直の換字對句法、「只今滿坐且つ酒尊、後夜此の堂空く
 月明」又曰、「田中誰か問ふ履に納れず、坐上適に來る何處
 の蠅ぞ」と曰ふが如き、其の法當に平字を下すべき處に
 於て、仄字を以て之に易ふ、其氣の挺然不群なるを欲
 す、貫曰、長孫佐輔の詩に、「獨、山家を訪て歇て還た渉る、
 茅屋斜に連て松葉を隔つ、主人語を聞て未だ門を開かず、
 籬を繞る野菜黃蝶飛ぶ、此の詩仄韻、而して起承の第二
 六字皆粘せず、又、柳宗元の詩に、「官情羈志共に淒々、春半
 秋の如く意轉た迷ふ、山城過雨百花盡き、榕葉滿庭鶯亂
 れ飛ぶ」是れ轉句粘せず、通して之を拗と謂ふ、亦準とす

春半如秋意轉迷、山城過雨百花盡、榕葉滿庭鶯亂飛、是轉句不粘、通謂之拗、亦不可準也、貫案、常建詩、一徑過幽處、後人或改、遇爲通、是反失體、杜甫漫興、後人改與爲興、孟浩然詩、孤帆遠映碧山盡、惟見長江天際流、後人改映爲影、山爲空、曾子固編太白集、有李白贈僧懷素草書歌、及笑矣乎悲乎來數首、東坡曰、是皆貫休以下詩格、必非太白所作、不知曾公何以信爲眞作也、可視李詩於當時、既如此、況於今日乎、後人攙入改竄、豈管是已。

吳體 老杜愁詩自注、強戲爲吳體、江草日日喚愁生、巫峽冷冷非世情、盤渦鶯浴底心性、獨樹花發自分明、十年戎馬陪萬國、異域

る可からざなり。

貫案するに、常建の詩「一徑幽處に過ふ」後人或は遇を改めて通と爲す、是れ反て失體、杜甫の漫興、後人與を改めて興と爲す、孟浩然の詩に「孤帆遠く碧山に映じて盡く、惟、見る長江の天際に流るを、後人映を改めて影と爲し、山を空と爲す、曾子固、太白集を編す、李白、僧懷素に贈る草書歌、及び笑矣乎、悲乎來數首有り、東坡曰、是皆貫休以下の詩格、必、太白の作る所に非ず、知らず曾公何を以て信じて眞作と爲すやと視る可し李詩當時に於て既に此の如し、況や今日に於てをや、後人攙入改竄豈管、是れのみならんや。

吳體 老杜愁詩の自注に、強いて戲れに吳體を爲ると、
「江草日々愁を喚び生ず、巫峽冷々世情に非ず、盤渦鶯浴す底の心性ぞ、獨樹花發いて自ら分明、十年戎馬萬國陪

賓客老孤城、渭水秦山得見否、人今罷病虎
縱橫、皮日休、獨夜有懷、因作吳體、病鶴帶露
傍獨屋、破巢含雪、傾孤枯、濯足將加漢光腹、
抵掌欲捋梁武鬚、隱几清吟誰敢敵、枕琴高
臥真堪圖、此時枉欠高散物、補瘤作尊石作
壚、方虛谷曰、拗句之詩、老杜集、七言詩中、謂
之吳體、杜詩七律一百五十九首、而此體凡
十九出、不止句中拗一字、往往神出鬼沒、雖
拗字甚多、而骨節愈峻峭、實案吳體即吳聲、
與拗句自別、劉禹錫始製竹枝詞、其音協黃
鐘、羽末、如吳聲、是也、不然、少陵豈下強戲作
之字乎、故後之爲此調者、必名題分異、猶竹
枝也、李于鱗不解拗句吳調、評少陵曰、憤焉
自放、可亦笑。

く、異域賓客孤城に老の渭水秦山見るを得るや否や、人今罷病し虎縱橫、皮日休、獨夜懷ふ有り、因て吳體を作る、病鶴露を帯びて獨屋に傍ふ、破巢雪を含んで孤枯を傾く、足を濯て將に加へんとす、漢光の腹掌を抵て捋らんと欲す、梁武の鬚、几に隱て清吟す誰か敢て敵せん、琴を枕にして高臥す眞に圖するに堪へたり、此時枉けて欠く高散の物、補瘤を尊と作し石を壚と作す、方虛谷曰、拗句の詩、老杜集、七言詩中之を吳體と謂ふ、杜詩七律一百五十九首、而して此の體凡そ十九出、止、句中に一字を拗するのみならず、往々神出鬼沒、拗字甚多しと雖も、而して骨節愈峻峭、實按するに、吳體は即吳聲、拗句と自ら別なり、劉禹錫始めて竹枝の詞を製す、其の音黃鐘に協ひ、羽末、吳聲の如き、是れなり、然らざれば、少陵豈に強て戲に之を作るの字を下さんや、故に後の此の調を爲す者は、必名題分異、猶は竹枝のごときなり、李于鱗、拗句吳調を解せず、少陵を評して曰、憤焉として自放すと、亦笑ふ可し。

虛接格 此法第三句以虛語接前二句如

張籍秋思詩洛陽城裏見秋風欲作家書意
萬重復恐匆匆說不盡行人臨發又開封。

香奩體 是作閨女宮嬪窈窕臙脂之態也

楊維禎曰宮詞者詩家之大香奩也不許村
學究之語。

竹枝詞 藝苑名言曰本出巴渝劉禹錫在
沅湘以俚歌鄙陋乃依騷人九歌作九章教
里中兒歌之其音協黃鐘羽末如吳聲含思
宛轉有淇濮之豔。

楊柳枝 樂府集曰柳枝白居易作也白有
妓樊素善歌小蠻善舞白既年高而小蠻豐
豔乃作柳枝詞以托意云一樹春花萬萬枝
嫩於金色軟於絲永豐西角荒園裏盡日無

虛接格 此の法第三句虚語を以て前二句に接す張籍
秋思の詩の如し洛陽城裏秋風を見る家書を作らんと
欲して意萬重復恐ふ匆匆説き盡さざるを行人發する
に臨んで又封を開く。

香奩體 是れ閨女宮嬪の窈窕臙脂の態を作るなり楊維
禎曰宮詞は詩家の大香奩なり村學究の語あるを許
さず。

竹枝詞 藝苑名言に曰本巴渝に出づ劉禹錫沅湘に在
て俚歌の鄙陋なるを以て乃騷人九歌に依て九章を作
り里中の兒に之を歌はしむ其の音黃鐘に協ひ羽末吳
聲の如し思を含んで宛轉として淇濮の豔有り。

楊柳枝 樂府集に柳枝と曰ふ白居易の作なり白に妓
樊素有善く歌ふ小蠻善く舞ふ白既に年高く而して
小蠻豐豔乃ち柳枝の詞を作り以て意を托すと云ふ一
樹春花萬々枝金色よりも嫩絲よりも輕し永豐西角荒

人屬阿誰、王漁洋曰、柳枝專咏柳、竹枝泛詠風土。

白戰 此體創於歐陽公賦雪詩、乃禁玉月梨梅絮鶯皓素銀、袁安、東郭等字、譬猶赤手與人戰、東坡詩、白戰不許持寸鐵、詠之也。

用助字格 羅大經曰、詩用助字貴帖妥、杜詩去矣英雄事、荒哉割據心、又古人稱、逝矣吾道卜終焉、山谷詩、且然聊爾耳、得也自知之、明王禪詩、使乎吾語汝、白也近如何。

雙聲疊韻 李群玉詩、方穿詰曲崎嶇路、又鈎轉格磔聲、詰曲崎嶇乃雙聲也、鈎轉格磔乃疊韻也、是即東坡口喫詩是也、使口吃者誦之、必噴飯。

襲用語 白居易、東澗水流西澗水、南山雲

園の裏、盡日人無く阿誰に屬す、王漁洋曰、柳枝は専ら柳を咏じ、竹枝は泛く風土を詠す。

白戰 此の體、歐陽公之雪の詩を賦するに創る、乃ち玉月梨梅絮鶯皓素銀、袁安、東郭等の字を禁ず、譬へば猶ほ赤手にして人と戦ふがごとし、東坡の詩に、「白戰許さず寸鐵を持するを」と之を詠するなり。

助字を用ふる格 羅大經曰、詩、助字を用ふるは帖妥なるを貴ぶ、杜詩に「去れ、英雄の事、荒なるかな割據の心」又「古人稱す、逝け、吾が道終焉を下す」山谷の詩に「且つ然く聊か爾るのみ得る也身り之を知る」明の王禪の詩に「使ひか吾、汝に語けん、白や近ごろ如何ん」。

雙聲疊韻 李群玉の詩に「方に穿つ詰曲崎嶇の路」又、鈎轉格磔の聲「詰曲崎嶇は、乃雙聲なり、鈎轉格磔は、乃疊韻なり、是れ即ち東坡口喫の詩、是れなり、口吃者に之を誦せしめば、必ず噴飯ならん」。

襲用語 白居易の「東澗の水は流る西澗の水、南山の雲

過北山雲、此例甚多、重套可厭、韓偓詩、萬里清江萬里天、一村桑柘一村煙、自覺清新。

古人姓名藏句中格 王荆公詩、老景春可惜、無花可留得、莫嫌柳渾青、終恨李太白、權德輿詩、潘宣乘、戎寄衡石崇、位勢年紀信、不留、弛張良自愴。

藥名入句中格 元陳島詩、丈夫懷遠志、努力苦參商、過海防風浪、何當歸故鄉。

隱語 楚荀況五賦、純用隱語、曹娥碑亦然、藝林伐山載、唐高宗造鏡殿、武后意也、四壁安鏡、爲白晝祕戲之需、楊廉夫詩曰、鏡殿青春多祕戲、玉肌相照影相摩、六郎酣戰明空笑、隊隊鴛鴦漾漾波、明空卽疊。

倒字 藝苑雌黃曰、古人詩、押字有語顛倒

は過ぐ北山の雲、此の例甚多し、重套厭ふ可し、韓偓の詩に「萬里の清江萬里の天、一村の桑柘一村の煙と、自ら清新を覺ゆ。

古人姓名、句中に藏する格 王荆公の詩に「老景春惜む可し、花の留め得可き無し、嫌ふ莫れ柳の渾て青きを、終に恨む李の太だ白きを」權德輿の詩に「潘宣、戎寄を乘り、衡石位勢を崇す、年紀信に留らず、弛張良に自ら愴る。

藥名、句中に入る格 元の陳島の詩に「丈夫遠志を懷く、努力、參商を苦む、海を過ぎて風浪を防ぐ、何つか當に故郷に歸るべき。

隱語 楚の荀況の五賦、純ら隱語を用ふ、曹娥の碑も亦然り、藝林伐山に載す、唐の高宗、鏡殿を造る、武后の意なり、四壁鏡を安し、白晝祕戲の需を爲す、楊廉夫の詩に曰、「鏡殿青春祕戲多し、玉肌相照して影相摩す、六郎は酣戦し、明空は笑ふ、隊々の鴛鴦漾々の波」と、明空は卽ち疊。

倒字 藝苑雌黃に曰、古人の詩、押字、語顛倒して理に害

而無害於理者、如韓退之以參差爲差參、以玲瓏爲瓏、玲漢溪詩話曰、字有顛倒可用者、如綺羅羅綺畫圖、圖畫羽毛、毛羽、白黑、黑白之類。

詩癖 玉屑曰、楊炯好用古人姓名、人目云、點鬼簿、駱賓王好用數對、人目云、算學士、宋王岐公好用於今玉瓊碧之字、人目云、至寶丹、李于鱗好用風塵之字、人目云、李風塵、鄭谷好用僧字、魏野好用鶴字、或有詩、仲先筆苑多籠鶴、鄭谷詞擅愛恣僧。

詩地相肖 陳玉璣曰、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、妙矣、然亦詩與地相肖、故爾若云、南城門外報恩寺、豈可不笑。

剽竊 此作家之大禁、唐僧詩、河分岡勢斷、

三六
 〇〇者有り、韓退之の參差を以て、差參と爲し、玲瓏を以て瓏玲と爲すが如し、漢溪詩話に曰、字顛倒して用ふ可き者有り、綺羅羅綺畫圖、圖畫羽毛、毛羽、白黑、黑白の類の如し。

詩癖 玉屑に曰、楊炯好て古人の姓名を用ふ、人目して點鬼簿と云ふ、駱賓王好て數對を用ふ、人目して算學士と云ふ、宋の王岐公好て金玉瓊碧の字を用ふ、人目して至寶丹と云ふ、李于鱗好て風塵の字を用ふ、人目して李風塵と云ふ、鄭谷好て僧の字を用ひ、魏野好て鶴の字を用ふ、或ひと詩有り、「仲先の筆苑多く鶴を籠し、鄭谷の詞壇愛して僧を恣く。」

詩地相肖たり 陳玉璣曰、「姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る、妙なり、然れども亦詩と地と相肖たるが故に爾り、若し「南城門外の報恩寺」と云はゞ、豈に笑はざる可けんや。」

剽竊 此れ作家の大禁、唐僧の詩に、「河は岡勢を分ちて

春入燒痕青、有僧嘲其踏襲云、河分岡勢司空曙、春入燒痕劉長卿、不是師兄偷古句、古人詩句犯師兄。

拙句 羅大經曰、作詩、必以巧進、以拙成、

葉石林曰詩語忌過巧、戴植の鼠璞曰、王介甫但知巧語之爲詩、不知拙語亦詩也、山谷但知奇語之爲詩、不知常語亦詩也、池塘生春草、楓落吳江冷、年年歲歲花相似、歲歲年年人不同之類、毫如不著意、自然妙。

詩話 唐無詩話之名、始見於歐陽文集、蓋司空曙詩品、孟啓本事詩、范攄雲溪友議、是其所本也、自此歷代諸家相次有詩話。

詩文集 袁中郎曰、隋經籍志云、集之名東京所創、蓋指班史某人文幾集、某人詩幾稿

斷え春は燒痕に入て青し、僧有り其の踏襲を嘲りて云ふ、「河は岡勢を分つ司空曙、春は燒痕に入る劉長卿、是れ師兄が古句を偷みしにあらず、古人の詩句師兄を犯す」

拙句 羅大經曰、作詩、必ず巧を以て進み、拙を以て成る、

葉石林曰詩語は過巧を忌む、戴植の鼠璞に曰、王介甫は但、巧語の詩たるを知りて、拙語も亦詩なるを知らざるなり、山谷は但、奇語の詩たるを知りて、常語も亦詩なるを知らざるなり、「池塘春草を生ず」楓落ちて吳江冷なり「年年々歳々花相似たり、歳々年年々人同じからず」の類、毫も意を著けざるが如し、自然に妙なり。

詩話 唐に詩話の名無し、始て歐陽文集に見ゆ、蓋司空曙の詩品、孟啓の本、事詩、范攄の雲溪友議、是れ其の本づく所なり、此れより、歷代諸家相次で詩話有り。

詩文集 袁中郎曰、隋の經籍志に云ふ、集の名は東京に創る所、蓋班史の某人文幾集、某人の詩幾稿を指て、言

而言、後人集之、非自爲集也、齊梁間、始有自爲集者、王筠以一官爲一集、江淹自名前後集也。

梵詩 櫻陰腐談曰、五天南海盛好詩文、殆過漢地、與此方作例尙無異也、賈曰、唐義淨三藏、寄歸傳、有咀羅太子馬鳴尊者詩、可見其行久矣。

詩境 隨園詩話曰、詩境最寬、有學士大夫、讀破萬卷、窮老盡氣、而不能得其闢奧者、有婦人女子、村氓淺學、偶有一二句、雖李杜二義、必低首者、此詩之所以大也、趙翼曰、雖小夫室女之飄吟、亦與聖賢歌詠並傳、以各言其志而已。

餘論 古人有詩、吟安一個字、撚斷數莖鬚、

ふ、後人之を集む、自ら集を爲すに非るなり、齊梁の間、始めて自ら集を爲す者有り、王筠、一官を以て一集と爲す、江淹自ら前後集と名くるなり。

梵詩 櫻陰腐談に曰、五天南海盛に詩文を好む、殆んど漢地に過ぐ、此方と作例尙ほ異なる無きなり、賈曰、唐の義淨三藏の寄歸傳に、咀羅太子馬鳴尊といふ者の詩有り、其行はるゝこと久しきを見る可し。

詩境 隨園詩話に曰、詩境最も寛し、學士大夫、萬卷を讀破し、窮老氣を盡し、而して其の闢奧を得る能はざる者有り、婦人女子、村氓淺學有り、偶、一二句、李杜二義と雖も、必低首する者あり、此れ詩の大なる所以なり、趙翼曰、小夫室女の飄吟と雖も、亦聖賢の歌詠と並び傳ふ、各其の志を言ふを以てのみ。

餘論 古人詩有り、二箇の字を吟安するに、數莖の鬚を

然如王安石彫斲極工、而其詩云、漢恩自淺、胡自深、可謂負君矣。幕府少年、今白髮、可謂背友矣。安石哭子雱死、曰、鳳鳥去、可謂侮慢聖人矣。如高青邱詩、羊車半夜出深宮、可謂無禮於君矣。如王維詩、萬戶傷心生野烟、見憂君悲時、陸放翁詩、王師克復中原日、見報國之志、講詩者、可不想哉。

「斲斲す」と然れども王安石の如き、彫斲極めて工、而して其の詩に云ふ、「漢恩は自ら淺く、胡は自ら深し」と、君に負くと謂ふ可し。「幕府少年、今白髮」と、友に背くと謂ふ可し。安石子雱の死を哭して曰、「鳳鳥去れり」と、聖人を侮慢すと謂ふ可し。高青邱の詩「羊車半夜深宮を出づ」といふ如き君に無禮なりと謂ふ可し。王維の詩の「萬戶傷心野烟を生ず」の如き、君を憂ひ時を悲むを見る、陸放翁の詩に、「王師中原を克復する日、報國の志を見る、詩を講ずる者、思はざる可けんや。」

詩格集成
終

日本詩話叢書